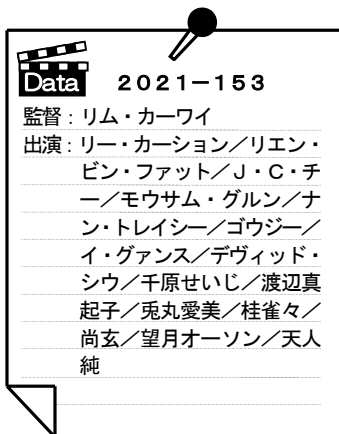




👁️👁️ みどころ

『欲望の翼』（90年）等のウォン・カーワイ（王家衛）は香港を代表する巨匠だが、マレーシア出身の“ドリフター”（漂浪者・放浪者）と言われるリム・カーワイとは？

「大阪三部作」として、『新世界の夜明け』（12年）、『Fly Me To Minami 恋するミナミ』（13年）に続く本作は、梅田（キタ）周辺で繰り広げる多国籍、多言語、マルチ視点による超メガ盛りの群像劇。時代が平成から令和に移る中、私がいつも自転車で通っている中崎町境界の人間模様はメチャ面白い！

白骨化死体の物語は新宿・歌舞伎町の方が似合いそうだが、中崎町で過ごす中国・台湾・韓国・マレーシア等の人々と、それに絡む日本の若者たちの3日間は超激動！158分間の長尺をしっかりと楽しみたい。

■□■ドリフター（漂浪者・放浪者）リム・カーワイに注目！■□■

マレーシア出身のリム・カーワイ監督は、“ドリフター”（漂浪者・放浪者）と呼ばれているそうだが、それは一体なぜ？全50作も続いた山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズの主人公、車寅次郎は“フーテンの寅さん”と呼ばれ、自分の生まれ故郷である葛飾柴又に定住することはなかった。それと同じように、リム・カーワイ監督も出身国であるシンガポールに定住することなく、あちこちの国を転々としている。そして、大阪の中崎町境界はそんな拠点のひとつらしい。

そのため彼は“ドリフター”と呼ばれているわけだが、大阪をこよなく愛する彼は、過去『新世界の夜明け』（12年）と『Fly Me To Minami 恋するミナミ』（13年）を完成させている。そして、今般、「大阪三部作」の最終章として本作を完成させ、公開することに！第1作の舞台は新世界、第2作のそれは心斎橋、そして本作の舞台は中崎町だ。

■□■大阪駅前再開発とうめきた再開発■□■

大阪駅前とは西日本最大の表玄関だが、私が大阪大学に入学した1967（昭和42）年当時は、なお“闇市”（？）があり、ネズミの肉を使った餃子（？）が売られていた、らしい。それを昭和44年に制定された都市再開発法に基づいて（再）開発した結果、完成したのが大阪駅前第1～第4ビルだ。

1974年の弁護士登録以降、ずっと大阪国際空港騒音訴訟、西淀川大気汚染訴訟に全力を傾注してきた私は、1983年6月に大阪駅前再開発問題研究会に参加したことをきっかけに「都市問題」をライフワークにすることになった。日本では1968年～70年にかけて都市計画法と建築基準法の大改正と共に、都市再開発法が制定されたことによって、「近代都市法（都市三法）」が成立。以降、都市再開発法に基づく市街地再開発事業が増大の一途をたどると共に地価の高騰が続き、1989年には土地バブルがはじけてしまった。

しかし、2001年の小泉純一郎内閣の登場によって都市再生特別措置法が制定され、新たな都市再生戦略が始まった。同法に基づく都市再生緊急整備地域や特定都市再生緊急整備地域の指定と、大幅な容積率の緩和による大規模な都市開発は、東京では丸の内や八重洲等で拡大したが、大阪でのポイントは、旧梅田貨物駅の跡地を活用したうめきた開発だ。私は2021年11月、うめきた第2期開発を見学したが、その規模の大きさにビックリ。他方、そこに隣接する中崎町境界は今なお古い町並みを残しているが、それは一体なぜ？そこに生きる人たちは如何なる生態を？

■□■老女の白骨化死体を巡って住人や刑事たちは如何に？■□■

本作は「カム&ゴー」というタイトル通り、中崎町を中心とする大阪キタ周辺に居住する日本人と、そこに集まってくるアジアを中心とする人々の“生態”をリム・カーワイ監督流に観察し、描き出した映画。その手法としてはドキュメンタリー方式もあるが、「ドリフター（漂浪者・放浪者）」と呼ばれるリム・カーワイ監督特有の演出による、大阪を舞台に、ここで暮らしている海外からやってきた外国人と日本人との交流のズレを、そして日常の葛藤を炙り出し描く多国籍ヒューマンドラマの方が、面白いに決まっている。そう思っていると、なんと本作は、“レンタルおじさん”と呼ばれている飯田（桂雀々）が一人で住んでいる中崎町のアパートのすぐ近くで、老女の白骨化死体が発見された、とのニュースで動き始めるからビックリ！捜査二課の刑事・富岡（千原せいじ）たちは、全力を挙げでその解明に乗り出したが・・・。

去る12月17日に大阪西梅田の「こころとからだのクリニック」で発生した放火事件は多数の死者を出したことで日本中を震撼させているが、本作に見る老女白骨化事件は、どこか牧歌的・・・？？？

■□■メインキャラは台湾、ベトナム、ミャンマーから■□■

大阪市北区西天満3丁目に事務所と自宅（マンション）を持つ私は、大阪・キター帯はすべて自転車での行動圏。映画館へ通う時はいつも中崎町の曲がりくねった道を通っているが、残念ながら様々な事情でそこに住んでいるアジア各国からの来訪者とお友達になったことはない。

本作を彩るメインキャラは、①台北から定期的に大阪に来て、アダルト関連グッズを買い漁るAVオタクの台湾人・シャオカン（リー・カーション）、②ファッションを学ぶために大阪の専門学校に入り、学費を稼ぐため印刷工場とスーパーマーケットのバイトを掛け持ちしているミャンマー人・ミミ（ナン・トレイシー）、③ベトナムからやってきた技能研修生で、ミミも務める印刷工場で働いているベトナム人・ナム（リエン・ビン・ファット）の3人。つまり、それぞれ何らかの事情を持ち、何らかのいわく、因縁を抱えた、一見“ヘンな奴”ばかりだ。

大阪で長年弁護士稼業をしていると、アジア各国からやってきたこんな中途半端な連中（？）の相談を聞く機会も多いが、中崎町にとって、大阪キタにとって、はたまた日本にとって、彼らの闊歩を歓迎するべき？それとも・・・？リム・カーワイ監督はもちろんそれに大賛成の立場で本作を作っているが、トランプ前大統領ならずとも、本作の3人のメインキャラのようなアジア人が大阪の街を闊歩することに眉をひそめる日本人も多いのでは・・・？

■□■更にネパール、韓国、香港、中国からも！■□■

“青春群像劇”を通り越し、大阪・キタを舞台にした、タイトル通りのまさに「カム&ゴー」的構成になっている本作は、156分という長尺の中で、3人のメインキャラの他、ネパール、韓国、香港、中国から大阪・キタに来ているさまざまな男女の生態を、リム・カーワイ監督の視点から描き出している。それらはすべて大阪弁でケツタイ、もしくはヤバイものばかりだから、それに注目！

例えば、ネパール人の男モウサム（モウサム・グルン）は中崎町のカフェで働きながら、日本語学校に通うネパール難民だが、日本語教師の佳子（渡辺真起子）と不倫しているから相当なタマ。しかも、佳子の夫は刑事の富岡だから、その行きつく先は？また、在日韓国人のリー（イ・グァンス）は釜山で風俗嬢をスカウトしては大阪に連れて来てひと儲けを企てている悪徳ブローカーだから、元々ヤバイ業界のヤバイ奴。しかして、そんな男の大阪・キタでの奮闘ぶりは？

他方、今や“台湾有事”は時間の問題と考えられているが、本作では、高校の歴史の教員を退職し、今は訪日観光ツアーに1人で参加している中国人のラオフアン（ゴウジー）とメインキャラのシャオカンが、中台問題のあらゆるテーマを代表するかのように、何とも言えず面白い行動と会話を繰り広げるので、それに注目！また、中国人観光客のツアーガイドをする男は、中国化された香港が住みづらくなり、日本人妻と幼い娘を連れて大阪に移住してきた張良（デヴィッド・シウ）だが、この男もどこかヘン……。本作でリム・

カーワイ監督が描く中国・台湾・香港問題の縮図のような論点(?)は如何に?また、その行きつく先は如何に・・・?

■□■主役の日本人女性は?なぜかマレーシア人が最高の男! ■□■

本作では、“レンタルおじさん”こと飯田や、日々犯人探しに奔走している富岡刑事、その妻・佳子ら中崎町に定住している日本人の“生態”が基本に据えられている。しかし、平成最後の混迷した時代、リム・カーワイ監督の目によれば、日本人にもリム・カーワイ監督と同じような漂浪者がいっぱいいるらしい。そんな日本人の女の子代表として描かれるのが、徳島の田舎からキャリアバック片手に大阪へやってきたマユミ(兎丸愛美)だ。彼女は、出会いカフェと漫画喫茶で寝泊まりする生活を繰り返しながら、街でスカウトされたAV出演やキャバ嬢のバイトにも挑戦!そんな風に大阪・キタの大都会を彷徨っている彼女の生き方は、とにかく不器用で危なっかしい。

他方、本作で唯一、紳士的かつ誠実な人柄で、誰からも信望が厚いキャラクターの男がマレーシア人のウィリアム(J・C・チー)だ。ある日、大阪の街でマユミとすれ違ったウィリアムは、儚げな彼女が気になって仕方がないようだが、リム・カーワイ監督が描くそんな2人の行きつく先は・・・?

本作にはその他、日本人の母とアメリカ人の父を持つハーフの男・ケンジ(望月オーソン)や、中崎町で今にも潰れそうなAV製作会社を営みながら、自ら演出も手がける沖縄出身の男・竜司(尚玄)も登場し、それぞれ怪しげな“生態”を披露するので、それにも注目したい。

2021(令和3)年12月27日記